説教20221113マラキ3：13-24ルカ21：5-19「主の日が来る前に」

今の世は世紀末というのでしょうか、何か誰も時代の先行きが見通せず、果たして何を信じていいのか、どのように行動していけばよいのかと思案に暮れて、不安と焦りの中、生活していると言えるかも知れません。今迄の様に、世間に合わせて、国家の言うとおりにしていれば、それなりに幸せになれる、という甘い時代ではなくなったかも知れません。

何とも言えませんが、聖書の中で、イエス様は、この世紀末の世の中こそ、私たちが真剣に身をもって証しをできるチャンスなのだということを言われています。

今日の聖書箇所は、恐ろしいことが語られていますので、私たちはかえってそのことを現実的に捉え、身につまされる出来事として聞いていく方が良いでしょう。このことを何か作り話の様に、遠い国の出来事として耳に入れてしまいますと、かえって私たちは不安になって様々な惑わしに引っかかってしまうかも知れません。

私たちが漠然とした不安から逃れる方法は、その不安の素となっていることをありのままに見つめて、主イエスの光によってその実態を知ることでありましょう。主イエスはその上で、私たちが、今のこの困難な状況をどうすれば打破できるのか、私たちがそれぞれ置かれた場で、何ができるのかを示して下っています。そういう意味で、今日のイエス様の御言葉は、力と知恵に満ちた、実践的な御言葉であります。

今日の聖書箇所で、最も実践的で、且つ普遍的に適用できる御言葉は、今日の聖句でも挙げました、ルカ福音書21章14節の「だから、前もって弁明の準備をするまいと、心に決めなさい。」です。これだけではピンときませんから、これに関連する聖句を上げますと、ルカ福音書１２：１１～

「会堂や役人、権力者のところに連れて行かれたときは、何をどう言い訳しようか、何を言おうかなどと心配してはならない。言うべきことは、聖霊がそのときに教えてくださる。」

これでかなりイエス様の言われることがはっきりしてきましたが、すなわちイエス様は、私たちが何か大変恐ろしいことが起こることを前にして、それに怖気づいてしまって、それから逃れるための言い訳や方策をあれこれ準備してはならないと言われているのです。このことは、イエス様の有名な御言葉「だから、明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦労は、その日だけで十分である。」にも一脈通じることでありましょう。私たちは恐ろしいこと大変なことを前にして、前向きにではなく、不安感に苛まれながら、逃げを打つために、色々な言葉や心構えを準備しがちでありますが、そうしますと、かえって私たちは主イエスから遠ざかってしまうことになります。

ですから私たちはそういった余計な心の準備にかまけるのではなくて、最初から聖霊

に我が身を委ね、もうすべて聖霊の神様にお任せして、心も体も神様に預けて、その上で、その場その時に口をついて出て来る言葉を語りなさい、とイエス様は言われているのです。

イエス様は言われます。「民は民に、国は国に敵対して立ち上がる。

そして、大きな地震があり、方々に飢饉や疫病が起こり、恐ろしい現象や著しい徴が天に現れる。しかし、これらのことがすべて起こる前に、人々はあなたがたに手を下して迫害し、会堂や牢に引き渡し、わたしの名のために王や総督の前に引っ張って行く。」

この御言葉の前半は、今私たちが直面しているウクライナでの戦争などやコロナ感染症などのことを具体的に言われているのだということが分かります。しかし、後半の、人々があなた方に手を下して迫害する云々ということは、いかがでしょうか。私たちクリスチャンは今の世で決して危害を加えられることもないし迫害されてないとして、この後半の下りは、何か遠い国での出来事のように私たちは思ってしまうのではないでしょうか。

しかし私たちはこの後半のくだりも自分自身のこととして捉えていく必要があります。私たちは、今の世で迫害され、異教徒の会堂や牢に引き渡され、役人の前に引っ張られていくことはありません。しかし、今の統治者は、この頃よりもっと賢くなり、クリスチャンを減らしていくために、様々な言葉で誘導し、教会堂に集うクリスチャンの数自体を減らすことを画策し、私たちはまんまとその術中にはまっているのかも知れません。

「人々はあなたがたに手を下して迫害し、会堂や牢に引き渡し、わたしの名のために王や総督の前に引っ張って行く。それはあなたがたにとって証しをする機会となる。」

今の世で、クリスチャンに対するあからさまな迫害が行われず、私たちが権力者の前に引っ張られていくことがない、ということは、善いことの様ではありますが、覚悟を決めて証しをする機会が与えられないという意味では、何か残念な事であります。私たちはそういったはっきりした迫害の場面に遭遇することがない代わりに、何かもやもやとした、どうしてよいのか途方に暮れた状態で、自らの信仰を告白しているという状態かも知れません。

しかし、そう言った今日の状況にあっても、14節の「だから、前もって弁明の準備をするまいと、心に決めなさい。」という心構えをすることは、有効だと思われます。

「何を言おうかなどと心配してはならない。言うべきことは、聖霊がそのときに教えてくださる。」このイエス様の御言葉に従って、聖霊に導かれて、その時、私たちはどのような言葉を語らされるのでしょうか。

私たちが口にする言葉というのは正直なもので、その時にその人の中にある思いや考えがそのまま言葉に顕れるのです。しかし中には、巧みに心にもないことを口で言い表せる人もいて、それゆえ人間は欺かれ惑わされてしまうのですけれども、イエスキリストを欺くことは決してできないのです。このことは、

人の口からは、心にあふれていることが出て来るのである。善い人は、良いものを入れた倉から良いものを取り出し、悪い人は、悪いものを入れた倉から悪いものを取り出してくる。

と聖書に書いてある通りです。

それではよい言葉とはどういうものでしょうか。

この良いという形容詞は、聖書の初めの創世記でいの一番に語られた形容詞です。そこには「神は光を見て、よしとされた」「神はお造りになった全てのものをご覧になった。見よ、それは極めて良かった」と記されています。良い、これはヘブライ語でトｏ―ブと言いますが、これには幅広い意味合いがあります。正しい、よい、喜ばしい、美しい、心地よいなどという意味です。

良い言葉、というのは当然正しい言葉であります。嘘や不正の言葉は、善い言葉とは言えないでしょう。

私たちは、プロテスタント教会の歴史の中で、このすべてつくられたものを神がよしとされた、トｏ―ブとされたということを、えてして、正しさや神の正義といった意味合いで捉えて来たのではないでしょうか。しかし、トｏ―ブのもう一面である美しさということを私たちは決して疎かにできないと思います。主なる神は全ての被造物を美しい者として造られたのです。

今日の聖書箇所もあまりに、正しさ、神の義という方に重点を置いてしまいますと、いつしか、神の義が、人間の義となり、人々がそれぞれの立場で人間の義を主張し合うようになって、益々、戦争や暴動が激化してしまうと言った、歴史上お定まりの成り行きが想起されてしまいます。

このことについて考える時、先週の木曜祈祷会で採り上げられた詩編４５編の御言葉は大変心に響いて参ります。詩編４５は次の様に歌い始めます。

心に湧き出る美しい言葉／わたしの作る詩を、王の前で歌おう。わたしの舌を速やかに物書く人の筆として。

心に湧き出る美しい言葉、これこそトｏ―ブのもう一つの大切な意味合いです。

イエス様の御言葉は全て美しく一点のしみもありません。そして御言葉を聞く私たちも、心清められて、そうして自ずから美しい言葉を口にするように変えられていくのです。美しい言葉というのは、穏やかで、配慮に富み、相手に生きる勇気と喜びを与えるものです。

そして箴言に記されているとおり、

穏やかな心は肉体を生かし

柔らかな応答は憤りを静め

知恵ある人の舌は知識を明らかに示し

癒しをもたらす舌は命の木

なのであります。この様に私たちが発する美しい言葉の一言一言によって教会は祝福され、建て上げられていくのです。

詩編は、私たちの日々の祈りの歌であると先日来られた田中光先生は教えて下さいましたが、もう少し詩編４５編から引いて参りましょう。

あなたの衣はすべて／ミルラ、アロエ、シナモンの香りを放ち／象牙の宮殿に響く弦の調べはあなたを祝う。

諸国の王女、あなたがめでる女たちの中から／オフィルの金で身を飾った王妃が／あなたの右に立てられる。

王はあなたの美しさを慕う。王はあなたの主。彼の前にひれ伏すがよい。

ティルスの娘よ、民の豪族は贈り物を携え／あなたが顔を向けるのを待っている。」

王妃は栄光に輝き、進み入る。晴れ着は金糸の織り

美しい香り、美しい宮殿のたたずまい、美しい衣装、美しい食べ物、これらも皆、主なる神が良き者としてお造りになり、その美しさで、被造物同士が喜び合い、幸せになる事を主なる神は望まれていたのでした。

この被造物の世界の美しさをこの様にほめたたえるのは何と、心晴れ晴れとして喜びに満ち足りることでしょうか。それはもう何か実物がなくても、喜んでおられるような計り知れない喜びであります。この様な、主なる神が意図された美しさというのは、美しい言葉に根ざして、朽ちることがない美しさなのであります。

この様に、私たちは、恐ろしい場面に立たされた時も、聖霊に身を任せ美しい言葉を口にすることによって、そこに神の言葉と知恵が働いて、その場は、喜びの場へと変えられていくのです。

それは言い知れぬ、美しい御言葉の恵みでありますが、ただし、この美しさも私たち人間がそれを与えて下さった神様のことを忘れ、美しさそれ自体に酔いしれてしまうようになると、私たちは思いもしない嫉妬などの激情の虜とされて、その美しさを奪い合うということになっていまいます。

今日のルカ福音書で主イエスは、そんな美しさに酔っている人間の姿にも言及されています。

ある人たちが、神殿が見事な石と奉納物で飾られていることを話していると、イエスは言われた。「あなたがたはこれらの物に見とれているが、一つの石も崩されずに他の石の上に残ることのない日が来る。」

神殿を飾った見事な装飾品に見とれるということは、果たして悪いことなのでしょうか。美しい装飾品それ自体は悪い者ではないでしょう。しかしそれに見とれていて、それを作り出した美しい御言葉を疎かにするのであれば、その美しさは、私たちにとってあだ花ととなってしまうことでしょう。

私たちは、主イエスが何の見る処もなくみじめでひどい姿で十字架に付かれたことを思い起こしましょう。そして、どんなひどい姿からも、美しい言葉を紡ぎ出すことがおできになるこのお方に倣って、私たちもどんな恐ろしい場面にあっても美しい言葉と知恵を紡ぎ出すことが出来る器へと変えて下さることを、主に祈り願います。

祈ります

父なる神よ

あなたは、この世の中で、私たちがなしている、ひどい思いや、ひどい言葉、ひどい行いの一つひとつを全てご存じでありながら、それらを多めに見ていて下さいます。しかし、私たちのこれらの罪が日々あなたを悲しませていることを、私たちにその都度知らしめ、私たちの罪を悔い改めさせてください。

あなたは、御前に進み出て、祈りをささげる一人一人の罪を赦し、そのひどさを美しさへとつくり変え、愛する者へと変えて下さいます。その大いなる恵みを喜び、あなたに感謝と賛美を捧げます。

どうか私たちが、あなたの御言葉に根ざした、内側から湧き出でる美しい言葉の数々によって、愛と平和に満ちた美しい共同体を築いていくことが出来ますよう、聖霊なる神の御守りとお導きを私たちにお与えください。